

南方（ラバウル）

ラバウル 奇跡の生き残り

愛知県 秋田 森治

私は大正十一（一九二二）年の生まれです。昭和十七（一九四二）年十二月一日に、三重県の齋宮というところにありました第五航空通信連隊へ召集で入隊致しました。そこで初年兵教育を受けまして、山本五十六元帥の国葬の日に宇品から出航することになりました。

当時は、既に制空権も制海権もアメリカに取られていたような状況下で、ラバウルに直航したのですが、駆逐艦が両側について途中までは送ってくれました。

しかし、ちょっと行くといつの間にか、それまで護衛してくれた駆逐艦の姿はなくなりました。そしてバラオまで直航して、そこで種々の補給をして、そこから再びラバウルへ直航して行きました。その当時は、もう敵の潜水艦がその辺にウロウロしていました。

私たちの乗った輸送船「秋津丸」と言うのは、航空母艦を改良した輸送船で、船倉には三段の段が作られ、そこに兵隊は詰め込まれてラバウルまで送られた訳です。そして航海途中の対空および潜水艦の監視は絶えず行われ、「敵艦発見！」「潜水艦発見！」などの情報が入る度に救命胴衣を着けるといふ、二十四時間警戒しながらの航行でした。幸いにして、無事ラバウルまで到着することができました。

「私たちが第四航空通信隊としてラバウルに到着した頃は、非常に現地の状態がよくて、マンガ並木の街道も賑やかな街でした。そしてラバウルとココボとの中間のミナミザキというところがあり、非常に見晴らしのよいところがありますが、ここに私どもの連隊本部が置かれていました。私たちはラバウルで分隊として展開しましたので、ニューギニアにあった本隊とは、分かれ分かれになっていました。そのため、我々ラバウルの航空通信隊は、ニューギニアへ行っている本隊との通信を行うのが業務となっていました。」

ところがだんだん状態が悪くなってきたと、とくに空襲も盛んになってきました。それで私たち展開分隊は防空壕の中で通信業務を行うようになってきました。そのころ大將がラバウルにおり、その司令部のすぐ下で通信業務をやっていたのですが、ああいう偉い人はいつの間にか内地へ帰って行って、我々兵隊だけは残された状態になりました。そして本隊よりは「敵上陸」「通信所閉鎖」という受信が多くなってきました。結局は、ニューギニアにいた本隊は、ほとんど戦死し

ました。

しかし、私たちは、ラバウルにいたから終戦後内地へ帰還できたようなものですが、ニューギニアへ行っていたらどうなっていたか。ラバウルでも恐らく半分以上は亡くなっているような状態でした。

そしてラバウルには愛知県の第三師団など、約十万人の兵隊がいましたから、敵が上陸してきても、ちょっとやそつとのことではやられることはないと考えていました。そして既に敵の上陸に対する準備として、海岸線には地雷とトーチカを作り上げておりました。また、陸路の正面から来る敵に対しては、中央にあった山をトンネルでくり貫いて、両側に師団司令部などが全部入ることができるような防空壕もできていました。

ところが敵もさる者、そのような防備の状態が分かるからか、ラバウルへは上陸したり、攻撃して来なかったのです。放っておけば飛行機もないのだから、ということなのでしょう。当時ラバウルの飛行機はサイパン島がやられてから、全部トラック島へ移動して

いました。ラバウルには飛行機はなしでした。百式司偵が一機ありまして、これはトラック島との連絡機として使用されていきました。

また、いよいよ決戦体制ということで、我々航空隊員も全部地上部隊へ転属になり、混成第六連隊が編成されました。また、航空隊の一部は、テナ湾という飛行場の近くに、通信隊の一個分隊と飛行場大隊などが配置され、飛行隊の主力はここに駐屯したという状態になりました。

しかし、いよいよ持久戦、決戦体制の強化ということとなり、それには自給自足しなければならぬということ、原野の一部を伐採して畑を造成し、農耕班を編成して、一番速くできる農作物としてサツマイモ、タピオカ、などを栽培しました。これらは三カ月も経たないうちに成長し、これで食料は確保できました。しかしサツマイモやタピオカだけではいかんというところで陸稲も作るようにしました。

そうこうするうちに集合させられて集団生活に入っ

た訳です。こうしてラバウルのあちらこちらで、このような幕舎生活の集団生活が始まりました。そして終戦となり復員のリバティー船が来るまで、このような生活をしていて、内地へ還ったのです。

先に記したミナミサキというところは非常に見晴らしのよい所で、ラバウルに入る船舶の監視場にもなっており、平坦地には戦車隊もいました。少し向この糧秣廠にも第三師団の部隊がいました。

我々通信隊も終戦で閉鎖となり、軍の通信隊に転属となりました。

私どもは、ラバウルに結局約二年おりました。この間、ラバウルでは、椰子の実は絞って油を取り、新しい若い実は中のジュースがとても美味しく、冷やして飲むとよい飲料水となりました。パンの木も焼いて食べるとこれも美味しいものでした。タピオカはすって澱粉を取り、椰子の実の油でコロッケなどを作ったりして、自活生活にも非常に慣れて来しました。

私たちは通信隊でしたから、軍の通信へ転属しましたが、当時、その軍の通信の材料廠にいた横井さんという人（昔は肥料商）と一緒に、どちらが先に内地へ還っても互いに家族に知らせ合おうと約束しておったのですが、私の方が早く五月頃に帰還しました。そのころラバウルには復員の輸送船がどんどんと来ておりました。

私は三菱の大江工場に復員してきました。そこで一晩泊めて頂いて、それぞれの家に還った訳ですが、その時に退職金として軍曹二等級で千五百円頂きました。そのうち五百円は現金でしたが、千円は封鎖預金でした。

このようなことが私の復員当時の様子です。

それから就職が大変で、私はたまたま一級気缶士の資格を持っていましたので、大府の病院に一日置きのお勤めに就きました。そこは療養所で、食料の配給も多く、そこへ出掛けては昼食を頂きに行つて、帰つて来たという思い出が残っています。

そんなことをしているうちに、昭和二十三年に中日新聞社から話があつて就職し、定年まで勤めました。お陰で文書課をはじめ役職を歴任、定年前の半年前には中日本開発というゴルフ場の経営担当で出向し、五年ほど勤務しました。

そしてこのような勤務をしながら中京大学の講師を十年勤め、居合道を教えてきました。